

本日、真柱敬称奉告祭を執り行い、立教の元一日に思いを馳せ、教祖ひながたにかえり、たすけ一條の新たな門出を誓うことは、まことに意義深いことである。

思えば、旬刻限の到来と共に、教祖を、神のやしろに差し上げます、と誓った心定めにより、我々人類は初めて親神の御声を耳にし、真に救かる道を教えていただいた。神一條の心定めこそ、たすけの理をいただく根本である。

月日のやしろと定まり給うた教祖は、親神のたすけ一條の親心を、口に伝え筆に誌し、更には、ひながたに示して人々を導かれたが、このひながたこそ、神一條の精神、ひのきしんの態度の如実の発露である。我々が教祖お一人に心を結び、ひながたを素直に辿る時、一手一つの和は自ずから生まれ、願う三信條は具現される。

常にひのきしんに励み、教祖のお心一つに睦む時、成程の理を世に映し、たすけ一條のにをいがけは、無言の中にも進められる。

神一條の行動は、人間思案の窓を通して眺める時、時には常識外れと嘲笑されることもある。しかし、教祖のひながたに照らして考える時、ふしを通してこそ、大きな芽を吹く素地は耕される。教祖は苦勞を苦勞と思召さず、ふしから芽が出る、と、いそいそとたすけ一條に歩み続けられ、今日の道をおつけ下された。如何なふしの中も心倒さず、明るく神一條を貫き通すところに、必ず道が開ける証しをお見せいただいた。真実の伏せ込みを通してのみ、明るい守護はいただける。

やまさかやいばらぐるふもがけみちも

つるぎのなかもとふりぬけたら 一 47

まだみへるひのなかもありふちなかも

それをこしたらほそいみちあり 一 48

ほそみちをだん々々せばをふみちや

これがたしかなほんみちである 一 49

このはなしほかの事でわかないほとに

神一ぢよでこれわが事 一 50

と、神一條の道を進む者の心構えをお教えいただいている。神一條に進む時、親神は必ず不思議なたすけをお見せ下される。蒔いた種なら、旬を見て必ず生やして下される。

存命の教祖は、常に原典を通して、親しく語りかけて下さっている。まことに有難いことと言わねばならない。この篤い親心を感謝しつつ、日々教えを求めて心のふしんに励み、身に溢れる成程の理を世に映して、出でては、親神の教えを世界に伝えるたすけ一條に励み、入りては、真実の限りを尽して縦の伝道にいそしんでこそ、教祖の親心に応えさせていただける。これが我々の使命である。たすけ一條の尊き使命に感じ、明るく前進を続ける歩みの中に、親神もお勇み下され、自由自在の守護をお見せ下される。

これからハをくはんみちをつけかける

せかいの心みないさめるで 二 1

親神は、世界一列陽氣ぐらしの往還道をつけかけ、世界の心をみな勇ます、とて、早くから先回りをして、お待ち下されている。現下の世界の情勢を眺める時、世界はだめの教えを希求している。対立抗争に喘ぐ世界を救けるのは、この人間世界を創造せられた親神の教えを措いて外にはない。旬は満ちている。

存命の教祖の手足として、その思召を伝えるのがよふぼくの使命である。教祖の道具衆と教えられたよふぼくは、この使命を体して、ひながたを辿りたすけ一條に生きることが、教祖にお喜びいただく唯一の道である。よふぼくも信者も一つ心に、ひながたを慕うて、神一條の道を楽しんで歩み続け、実があれば実があるで、とのお言葉通り、更にはのもししい将来の往還道へとお導きいただけるよう、教内全般の奮起を願ってやまない。

ここに門出に当り、真実を捧げて親神の末永き守護を願ひ奉る。